

396) 卒業してから

助手席に君が忘れた	CDをひとりで聞いて
^{なつ} 懐かしいあの湖へ	ただひとりクルマ走らす
湖を走る北風	耳たぶにまだ冷たくて
光のみ眩 ^{まぶ} しいほどに	輝いて心を誘う
あのころは暇さえあれば	あちこちにドライブしたのに
今はもう休みになれば	ごろごろとカウチポテトさ
秋風に君とふたりで	肩組んだ湖畔の道も
すっかりと枯れ草の中	思い出が埋もれてゆく
あのころの君の写真	はさんでるシステムノート
いつの日も肌身はなさず	どこへでも持ってゆくけど
写真より仕事の方が	たいせつになってるみたい
ぼくたちは卒業してから	だんだんと離れてゆくね
すりへったクルマのタイヤ	あれ以来取り替えてない
走る距離だんだん減って	ぼくたちの愛情みたい
湖にそっと浮かべる	すぎし日の恋の思い出
青空に描いてみたい	今日の日のふたりの心
助手席に君が忘れた	CDをひとりで聞いて
若かった過ぎし季節を	ただひとり懐 ^{なつ} かしむのさ